

ご わ さ ん かい  
互和讃会 26 年例会 (S37 年卒)

平成 26 年 9 月 29 ~ 30 日

9 月 29 日午後 1 時、近鉄奈良駅観光センター前に埼玉県、静岡県や名古屋等の遠方からの参加を含め、14 人が集合した。

今回の宿泊場所が駅から徒歩約十分の近さなので、ゾロゾロ歩いて猿沢池の傍にある旅館「飛鳥荘」に着き、荷物等を預けて奈良公園近辺の寺社拝観に出発した。二日間を掛けて拝観する寺社仏閣は何れも世界遺産、国宝そして重要文化財なるものばかりなので、この年になった今でもちょっと期待しながら全員徒歩で向かう。すぐ近くにあるのが興福寺、五重塔に隣接する東金堂、国宝館を拝観する。



興福寺東金堂



興福寺五重塔

国宝館の中には世界的にも有名な阿修羅像があるが、中央に安置されている高さ 5.2M もある迫力ある千手観音菩薩像には、願いを込めてであろう手を合わせている人も多かった。その後又ブラブラ歩いて東大寺大仏殿に向かう。このあたりになると非常に海外からの観光客が多いのに驚いた。その中でも中国人を中心としてアジア人がかなり多いように見受けられた。ツアー団体、グループや家族連れ、又中には若いペアも結構いたように思う。政治とは少し違う様だ。

随分昔修学旅行で訪れた記憶がある大仏さん（盧舎那大仏）はさすがに偉大な東大寺の本尊である。奈良時代に争いや疫病で荒廃した世の中を治めるために、聖武天皇が庶民に呼びかけ官民一体となって建立されたそうである 15M もある高さの仏像のその鎮座する姿には今も圧倒された。



大仏（盧舎那大仏）



二月堂

その後我々は3人で坂道を登り、東大寺境内で最も高い所にある二月堂にお参りした。他の11人は旅館に引き返した。お水取りで有名な二月堂の傍には三月堂、四月堂も並び建てられている。

更に若草山の下を通り、奈良公園一円の世界遺産の中で唯一神社である春日神社にも参拝した。

旅館に帰り、興福寺五重塔を眺められる露天風呂に浸かり疲れを癒す。夕食は古都奈良の和風旅館らしく見栄えも凝った和食会席で、それらを肴に杯を傾ける。宴会後は何時もの通りひとつの部屋に集まり、乾き物をつまみにしてビール、日本酒、焼酎やウイスキー等を飲みながらわいわい、ガヤガヤと歓談した。話題はやはり欠席者を含めた皆の健康のことになる。勿論山中、川崎両君の最近のゴルフの内容も話題になり、なんでも両君ともエージシュートを果たしたそうで、他の我々には縁遠く羨ましい限りである。

もう既に我々同期の1/3が他界しており、病を患っている仲間のことが心配になる。何とか体に気をつけて人数を維持してこの会を続けて行きたいと願いながら、来年の互和讃会は宇治に住んでいる又はゆかりのある者ということで柴田、三崎両君に幹事となってもらって宇治方面で開催することに決まった。

翌朝茶粥なども付いた朝食を済ませ、風邪気味であった川崎君は一足先に帰ったので、残り13人は迎えのジャンボタクシー2台に分乗して古都めぐりを続けた。先ず薬師寺を拝観した。



大講堂



玄奘三蔵院伽藍中央の玄奘塔

薬師三尊像のある金堂、また大講堂も美しく荘厳であるが、北側にある西遊記で有名な三蔵法師（法相宗の始祖）が祀られている玄奘三蔵院伽藍、その中にある平山郁夫画伯が遙か遠くの浄土を求めて旅に出た法師の求法の精神を、30年の歳月を掛けて描いた壁画にも強く感嘆した。その後このすぐ北にある唐招提寺にも訪れた。中国の唐の時代に日本の招きによって来朝し創建した鑑真大和上が祀られており、それがこの寺の名前の由来だそうである。最北端に大和上の御廟があり、大和上像が納められている御影堂は年三日しか公開されない為、身代わり像が開山堂に配され常時参拝出来る様になっている。

最後に訪れたのは平城宮跡である。広大な長方形の土地に向かい合うように非常に美しい大極殿と朱雀門が建立されているが、その中間を近鉄電車が通っているのがチョッと滑稽な感じもしないではない。朱雀門の隣にある平城京歴史館では日本の国づくりの歴史、大陸との交流、そして造り出された平城京や当時の様子等を展示物や映像で分かりやすく紹介していた。



朱雀門



大極殿 (バスの車窓から)

予定していた寺社拝観を終え大和西大寺駅まで送ってもらい、駅前で遅がけの昼食をとり、次の再会までお互いの健康を願いながらそこで解散した。二日間の世界遺産めぐり、いずれも境内は広大なのでこの時期にしては暑い中汗をかきながらの拝観であった。立派な建物の写真は撮れても内部の仏像などは撮影禁止で、素晴らしい多くの仏像等については拝観時の記憶のみなので不確かかも知れない。

#### 今回の出席者



薬師寺石碑前にて

#### 集合写真 (薬師寺南門の石碑前)

後列左から	宮崎 博	市川喜代始	三崎 歩	宮脇雄也	阪口文雄
	山中寛城	桜井建郎			
前列左から	池田晴充	柴田二三男	岩坪正光	斎藤邦秀	筆者
	福西興至				

(尚、川崎君は先に帰ったのでここでは不在)

山崎 治忠 記